

① 海と森の暮らしを感じる縄文空間

～縄文人の豊かな海と森に育まれた文化を伝え、学べるふるさと～

■縄文時代の遺跡

南相馬市内には土器や土偶、石で作った矢じりなどが出土する縄文時代の遺跡が200か所以上あります。これらの遺跡は、当時の主食とされるドングリなどの木の実採集を中心として、狩りや魚とりなど幅広い資源を利用しやすい場所に構えられています。中でも小高区の浦尻貝塚^{うらじりかいづか}、原町区の東町遺跡^{あづまちょう}、鹿島区の八幡林遺跡からは、多量の住居跡や出土品が見つかり、中心的なムラと考えられます。

■貝塚とは？

このような縄文遺跡の中でも、縄文人の食べた貝の殻が積み重なった貝塚は、普通の遺跡では腐ってしまう動物や魚の骨が保存され、当時の食べ物やなりわいを知ることができる貴重なタイムカプセルです。この貝塚は、鹿島区、原町区ではひとつも見つかっていませんが、小高区では多くあり、特に浦尻貝塚がある大正時代に干拓された旧井田川浦周辺は福島県有数の貝塚集中地帯となっています。

■縄文人の暮らしざり

これらの縄文遺跡からは、縄文人が海・川・森が近接する地域の多様な資源を巧みに利用し、また、移り変わる

環境変化にうまく対応していたことを学ぶことができます。例えば浦尻貝塚^{うらじりかいづか}や鹿島区の中才遺跡^{なかさい}で多量に出土する塩づくりの土器から、塩の運搬を通して遠いムラと交易していたこともうかがえます。

■海・川・山の資源を利用する

縄文時代以後も、魚とり、塩づくりなどの生業のほか、木や植物を材料とした道具づくりなど、自然を活かした暮らしは形を変えながらも続いてきました。このような暮らしは南相馬の生活文化の基盤を成してきており、多くの民俗資料がその豊かさを物語っています。そして、南相馬には現在も海、川、森がおりなす自然を活かした人々の営みを感じることができる景観が広がっています。各地にある多様な自然環境に育まれた文化遺産は、自然と共存してきた南相馬の生活文化の魅力を映し出しています。



現地説明会の様子（東町遺跡）

縄文空間を伝える文化遺産



うらじりかいづか
小 浦尻貝塚

小高区浦尻にある縄文時代の貝塚を持つ中心的な大規模集落です。海を見晴らすことができる高台にあり、約7ヘクタールの面積がある大きな遺跡です。長期間にわたり営まれていることと良好な保存状態が特筆され、東北地方の縄文時代を知るうえで極めて情報量の多い遺跡として知られています。

東日本大震災による津波は浦尻貝塚直下まで押し寄せ、貝塚の眼前のかつての浦であった所に海水が進入しました。



震災前の浦尻貝塚からの眺め



津波被災後の浦尻貝塚周辺

貝塚は昔の人が食べた貝などの食べかすが積み重なったものです。貝のカルシウム分によって守られた動物や魚の骨、シカの角などが出土し、縄文時代のことを深く知ることができます。



浦尻貝塚の貝層



浦尻貝塚出土のイノシシの骨

縄文時代の遺跡からは土器などの生活用具のほか、まつりに使われた土偶などの道具も出土します。浦尻貝塚から出土した土偶は、北東北の影響を受けた遮光器系土偶と呼ばれ、独特の顔立ちをしています。



浦尻貝塚出土の土偶

小 宮田貝塚

小高区上浦にある現在の海岸線から約5キロメートルも内陸にあたる場所にある貝塚で、浦尻貝塚よりも時期的に先行する貝塚です。貝塚がつくられた約6000年前は現在より気温が高く、海が深く内陸に侵入していました。

この宮田貝塚から出土した土器群は地域の特徴をよく示しているとともに、複雑な撚りの縄文を駆使した美しい土器としても評価されています。



宮田貝塚出土土器

小 蛸澤稲荷神社

古くから漁民信仰を集めた神社です。初午まつりの時に売られる風車が縁起ものとして知られています。明治時代の地引網の様子を描いた絵馬や和船模型などが奉納され、当地方の海への信仰・文化を伝えています。絵馬には捕った魚の取引の様子など当時の習俗が細やかに描かれており、かつての漁村を知る上で重要な資料です。



奉納絵馬地引大漁図

鹿島 宮後遺跡 (上杉窪遺跡)

鹿島区上杉窪の宮後遺跡は縄文時代(約4000年前)の石が敷かれた住居跡から人の姿を描いた土器が出土した遺跡として有名です。人の姿を土器に表現することは珍しく、縄文人が願いを込めて作った特殊な土器と考えられます。縄文人の宗教観やまつりに迫ることができる資料といえるでしょう。



宮後遺跡出土土器

原町 東町遺跡



見学の様子

原町第一小学校の東側にあたる原町区市街地に広がる4000年前頃の縄文時代の遺跡です。東日本大震災の防災集団移転事業に伴い、発掘調査が行われました。土器を埋めて石で囲んだ炉を持つ住居が、多数重なりあいながら集中して見つかりました。

鹿島 鷺内遺跡の編かご

鹿島区の鷺内遺跡で出土した約3000年前の編かごです。クルミが詰まったままの状態で見つかり、全国でも初めての例といえます。クルミを持ち運ぶのにちょうど良い形・大きさを備えており、縄文人のかご編み技術の高さを知ることができます。



クルミが詰まった編かご

小^い井田^だ川^{がわうら}浦^{えんでん}の塩田用具

干拓された小高区の井田川浦などで使用されていた塩づくりの道具が残されています。湯壺（バツポ）とよばれる用具は、塩を含んだ砂を入れ、濃縮した塩水をかけて、塩を取り出すことに用いられていました。江戸時代から近代にかけて、井田川浦のほかにも、^{やさわ}鹿島区の八沢浦など河口付近には多くの塩田が作られていました。



湯壺（バツポ）

小^{きゆうい}鹿^だ井田^{がわうら}川^や浦^{さわうら}・八沢浦の文化遺産



明神岩（鹿島区北海老）

明治時代まで干潟であった井田川浦、鹿島区の八沢浦、原町区^{かねざわ}の金沢浦は近代に農地拡大のため干拓されました。干拓功労者を祀る御祖神社、山田神社などの神社があり、干拓の歴史を物語ります。また、^{しおがま}塩釜明神が祀られていた北海老^{きたえび みょうじんいわ}の明神岩は、周りに海が広がっていた様子を今に伝えます。

鹿^{にい}原^だ新田^ま川^の・真野^{さけ}川の鮭漁

江戸時代から盛んであった鮭漁が現在も引き継がれています。新田川の鮭は江戸幕府への献上品であった記録もあり、当時から名産品であったことが知られています。また、原町区^{いづみ}泉地区では鮭の大量を祈願した恵比須講^{えびすこう}などの祭礼も行われていました。



新田川の鮭漁（原町区）